

氏 名 服 部 このみ  
学位の種類 博士 (文学)  
学位記番号 甲 第62号  
学位授与の日付 2016年3月18日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項 該当  
学位論文題目 **戦後ベストセラー小説と流行語**  
— 『斜陽』『三等重役』『太陽の季節』『美徳のよろめき』 —

学位審査委員 主査 教授 藤 森 清  
副査 教授 小 松 史生子  
副査 教授 田 村 章

## 論文内容の要旨

本研究では、第二次世界大戦後、焦土となった日本がGHQによる占領期を経て再び国際社会に受け入れられ、「もはや戦後ではない」と言われるまでのおよそ十年の間にベストセラーとなり、「〇〇族」という流行語を生みだした小説について考察した。

具体的には、1947年から1957年にかけてベストセラーとなった太宰治『斜陽』、源氏鶏太『三等重役』、石原慎太郎『太陽の季節』、三島由紀夫『美徳のよろめき』の四作品について、作品が流行し、作品をもとにした流行語が生み出されるまでの過程および社会状況の調査と、作品の分析を並行して行った。

この二つの作業を関連させることによって、1950年代当時の読者が小説を欲望・消費する理由の一つとして、自分たちの「上」にあたる階級や人物像への憧れがあり、それが小説をもとにした「〇〇族」という言葉の流行とベストセラー化という形で表れていることを示した。

これらの小説に関係する流行語には、「斜陽族」「三等重役」「恐妻族」「太陽族」「よろめき族」があり、いずれも集団を表す流行語である。

当時の読者やメディアはその作品に描かれる主題に新しさを感じたために、当時存在していなかった、もしくは存在はしていたもののそれに当てはまる言葉を持っていなかった集団を表す際に作品の名前を冠したのだと言えよう。

小説のベストセラー化が語られる際には、当時の世相・風俗が反映されているという理由が挙げられることが多いが、特定の集団を現す言葉を生みだした文学には、当時の時代状況と密接に関わった内容が描かれていることはもちろん、むしろ時代に先行した内容が描かれている可能性があると考えられる。

第一部では、流行語「斜陽族」を生み出した太宰治『斜陽』（1947年）を扱った。

これまで『斜陽』が読まれるようになった理由は、当時騒がれていた華族階級の没落を“写し取った”ためだと考えられていたが、『斜陽』は時代に先行して華族の没落を描いていた。だからこそ、没落する上流階級に「斜陽族」という名がつけられたのである。

当時の人々には滅び行く上流階級への郷愁が常に存在し、それによって『斜陽』や、没落華族の報道を求め、積極的に消費していったのではないかと考えられる。

第一章では、1945年から、1951年頃にかけての上流階級に関する報道を詳細に調査し、正確な実態を把握することを試みた。

太宰が『斜陽』で華族階級を扱ったのは、『斜陽』が連載されるまでの間に、華族の没落が世間で話題となっていたからだ、という意見が通説となっているが、実際の報道を調査した結果、太宰が『斜陽』を構想する時期から『斜陽』を連載するまでは、華族の没落はほとんど話題になっていないことがわかった。

むしろ、太宰が『斜陽』を連載するまでの時期に終始一貫して話題となっていたのは、皇族の臣籍降下（皇族が一国民と同じ身分になること）である。太宰が『斜陽』を構想した際、太宰の実家をモデルにした没落する旧家の悲劇として描かれる予定であり、地主階級という設定だったが、実際に発表された『斜陽』は、華族階級が没落していく話となっている。このことから、太宰は皇族の臣籍降下に影響を受け、『斜陽』の登場人物たちを華族階級へと変更したのだと思われる。

華族の没落に関する報道が目立つようになるのは、1948年6月以降である。太宰の入水自殺と時期が重なっていたことや、太宰の死に影響を受けて自殺したとみられる華族が実際に存在したことから、『斜陽』と結び付けて報道されるようになっていく。

また、没落する上流階級を意味する「斜陽族」という言葉が、『斜陽』の流行をきっかけに流行語となった。「斜陽族」がいつから使われていたかについては、太宰の生前から使われていたという説と、死後使われるようになったという説が混在しており、これまで曖昧であった。

しかし、今回の調査により、太宰の死後さかんに『斜陽』が没落華族の報道と結び付けられるとともに、1949年以降「読売新聞」を中心として「斜陽貴族」「斜陽族」という言葉が使用されている実態が判明した。

第二章では、第一章で確かめた階級の問題を踏まえて『斜陽』本文を分析し、主人公一家の階級が、皇族を想定して描かれた可能性が高いことを指摘した。

『斜陽』の登場人物の階級について、太宰自身は「皇族にほとんど近いぐらいの華族」と述べている。

この発言について、先行研究では華族階級であることの証明に使われることがほとんどであったが、報道の実態と合わせて考えてみると、太宰にとっては、華族であることよりも、皇族に近いことの方が重要であったと考えられる。

本文における階級描写の分析を通して、主人公一家の爵位や姓が示されないことや、主

人公であるかず子や他の人物が主人公一家を指す際、華族と断定せず、皇族と思わせるような曖昧な書き方をしていることから、皇族を想定して描かれた可能性が高いことを示した。

また、皇族に関する実際の報道と物語内の時間が照応しており、戦後の皇族の動向や生活ぶりが、母・直治の最期やかず子の発言に影響をもたらしていることを指摘した。

第三章は、『斜陽』がなぜ没落華族の悲劇として受容されてしまうのかについて、チャーホフの戯曲『桜の園』との関係から考えた。

『桜の園』は戦前から親しまれ、戦後ブームを巻き起こしたとされる。

『桜の園』には、上流階級の没落という悲劇的な面が描かれる一方で、新しい人生を歩んでいくことに喜びを感じる娘の姿も描かれている。

しかし、『斜陽』発表前後においては、『桜の園』は新しい人生を歩む姿よりも、悲劇的な面が強調された物語として受容されていることを示した。

また、当時『斜陽』を読んだ読者の感想を見てみると、母の最期のみを読み、その後のかず子の展開を無視しているものが多い。

『斜陽』構想の際、太宰は「日本の『桜の園』を書くつもり」だと明言しており、本文中にも『桜の園』を連想させるような展開や言葉が確認できる。

読者は『斜陽』を読む際に『桜の園』を連想し、そのことによって『斜陽』を上流階級の没落を描いた悲劇として受容してしまう面があったのではないかと考えられる。

第二部では流行語「三等重役」「恐妻（族）」を生み出した源氏鶏太『三等重役』（1952年）を扱った。

『三等重役』は、戦後の価値観を肯定的に描こうとした作品である。

この時代は、財力も権力も持った重役が愛妾を囲うことは当たり前の時代である。その中で、『三等重役』の主人公である桑原社長は、女性たちに誘惑されながらも、決して肉体関係を結ばない重役として描かれ、それによって他社の重役や、部下たちに評価されるという展開になっている。

また、桑原社長は、妻に頭の上がない「恐妻家」として描かれ、当時の日本に「恐妻」ブームを巻き起こした。

配偶者以外とは性的交渉をしないことによって成り立つ一夫一婦制的な価値観や、家庭内において妻に頭の上がない様子は、当時憧れとされたアメリカの夫婦観、家庭観と重なっている。

このことから、『三等重役』は戦後の夫婦観や男女観を、日本人が受け入れやすいようにユーモアを交えて書き換え、一般に広めた作品であることを指摘した。

第一章では、「三等重役」という言葉について分析した。

「三等重役」とは戦後現れた新しい重役像を指す言葉であるが、『三等重役』の連載が決まった際、源氏が「三等重役」という言葉に肯定的なイメージを付け加えていることがわ

かった。

また、それによって『三等重役』は戦後の価値観をいかに受け入れるか、という物語となったと考えられる。

「三等重役」という言葉が初めて登場した「艶福物語」（1951年）は、プレ『三等重役』とも言えるような作品であるが、「三等重役」という言葉を、戦後派重役自らが、戦前の重役より下であることを強調するための蔑称として用いている。

それに対して『三等重役』では蔑みの要素が薄められ、むしろ親しみやすさや肯定的なイメージで使用されていることを指摘した。

第二章では、『三等重役』をきっかけに流行した「恐妻（族）」について考察した。

「恐妻」は、『三等重役』が連載された時期に造られた言葉であるという説と、戦前から存在していたという説が混在していたため、具体的にいつから存在する言葉なのかを特定することにした。

調査の結果、「恐妻」という言葉は1924年の時点で使われている言葉であることが確認できた。戦後用いられるようになった「恐妻」はそれ以前のものとは多くの夫婦にあてはまるものに変化したことに加え、「恐妻家」と「愛妻家」が表裏一体のものであるという考えが当時の人々の共感・関心と呼んで広く受け入れられたことにより、流行語化したと考えられる。

第三章では、『三等重役』本文を分析し、桑原社長が戦前派重役と対峙し、立派な社長として評価されていくための価値観が何であるかを考察した。

第一章で挙げた「艶福物語」は、公職追放中の上司の愛妾であった女性を愛妾として囲うことによって、重役としての能力や自信を高めていくが、追放解除後、上司の元へ戻りたいと告げられてしまうという話である。

「艶福物語」には、戦前派重役の模倣ではなく、新しい価値観で対抗しなければ、戦前派重役をこえることはできないという戦後派重役の姿が示されていると言える。

それに対して『三等重役』の桑原社長は四人の女性に誘惑されるものの肉体関係を結ばない貞操堅固なキャラクターとして描かれる。「浮気は男の甲斐性」という価値観が堂々と示される中、貞操を護り続けることで部下や戦前派重役に評価されるという展開になっていることを示した。

第四章では、今までの分析を踏まえた上で、桑原社長に与えられた「恐妻家」という設定の分析を通して『三等重役』に描かれた戦後の価値観がどのようなものかを明らかにした。

「恐妻家」とは、妻を愛しているために、一夫一婦制を守ろうとする夫であり、妻に頭の上がない夫である。

この姿は、当時多くの人に読まれていたアメリカ漫画『ブロンディ』に描かれた夫婦の姿や、施策の成立にGHQが関与していたという「純潔教育」における「純潔」の定義一性的交渉は結婚当事者間におけるもののみを純潔と認める一と重なっている。

『三等重役』は当時の人々の憧れでもあったアメリカ的・民主的な夫婦生活をストレートに描くのではなく、ユーモアを交えつつ、戦前の日本にも存在した「恐妻」という思想を緩衝材にすることによってリアリティを持たせ、日本人に受け入れやすくした作品なのである。

第三部では、流行語「太陽族」を生み出した石原慎太郎『太陽の季節』（1956年）と、「よろめき（族）」を生み出した三島由紀夫『美德のよろめき』（1957年）を扱った。

両作の類似性を指摘する先行研究が複数確認できること、物語の構図・流行の過程が似通っていることから、第三部では二作品を扱うことにした。

先行論ではいずれも扇情的な主題がブームの要因とされるが、これらは当時の読者より上の階級に属するだろう人物たちの行為や価値観を、語り手が特殊なものとして語っていく作品でもあると言える。また、当時の読者たちが登場人物たちの財力やそれに伴う暮らしぶりに憧れと反発を抱いており、それが多くの読者を得る理由の一つであると考えられる一方で、ベストセラー化に伴い、出版社や雑誌メディアが積極的に性的な主題を喧伝している実態があることを指摘した。

第一章では、石原慎太郎『太陽の季節』について本文分析を行った。

『太陽の季節』は作家や当時の社会を巻き込む一大ブームとなり、さまざまな話題を呼んだ作品である。それ故に、先行研究の多くは外部状況の検証・整理にとどまり、作品そのものの分析が行われることは少なかった。

しかし、『太陽の季節』には、「太陽族」という新語を用いて表現しなければならないような、既存の言葉に当てはまらない青年像が作品内に描かれていたと考えられる。

そこで、本文に描かれた青年像を、主人公である竜哉の性格と、語り手の特徴を分析することによって考察した。

竜哉は自身の感情や行動の意味付けを行わない、「考えない」人物として描かれている。そして、竜哉が考えない人物であるということは、竜哉の側に沿った心理描写が不可能になることを意味する。

それに対して語り手は、「～だろうか」という形を多用することによって、不確定な事項であることを示しながら、竜哉の行動の分析や解説を執拗に重ねていく。

語り手の解説を除き、竜哉に関する叙述のみに目を向ければ、竜哉の行為や感覚は決してわかり得ないものではないが、語り手は竜哉が動機なく行った一連の行為に特殊さや残忍さを読み取り、強調していく。語り手が、竜哉の価値観を特異なものとして浮かび上がらせているのである。

また、処女作の「灰色の教室」と比較してみると、「灰色の教室」は主人公が、動機のない自殺を行う友人の解説をするという形をとっていたが、『太陽の季節』では主人公が動機なき行為者となっている。そのために、語り手が解説をしなければならないという構図になっていることを指摘した。

『太陽の季節』は、衝動的な感情によってのみ行動する動機なき行為者をいかに描くかという実験的な小説であると言える。

第二章では、三島由紀夫『美德のよろめき』を扱った。

『美德のよろめき』は倉越節子の婚姻外の恋愛を描いた小説であり、『美德のよろめき』という題は、「浮気をしてはいけない」という中流階級的な道徳を踏み外すことを意味しているというのが今日の通説である。

そして、その表現が時宜にかなっていたために「よろめき」という言葉が「妻の浮気」を意味するものとして流行・定着したとされている。

しかし、本文では「よろめき」は足もとがふらつくという本来の意味でしか用いられていない。

また、「美德」という言葉についても、本文では基本的に節子の美德として語られることが多く、節子の階級設定によっては中流階級的な道徳とは言い切れない。

先行研究において節子の階級に関する記述は統一されていないが、本文を読めば節子の階級が旧上流階級として設定されており、そのことは語り手によって執拗に語られている。

節子は上流階級意識を無意識に保ちつづけている人物であるが故に、世間や語り手が語り得る価値観とは相いれない価値観を抱く人物として存在しており、そのような節子の上流階級的な価値観が、世間的な価値観へとよろめく物語が展開されていく。

『美德のよろめき』というタイトルは、中流階級的な道徳の踏み外しを意味するのではなく、節子の上流階級意識が不安定になることを指しているのではないかと考えられる。

第三章では、『太陽の季節』『美德のよろめき』が当時の人々に読まれた理由を再考した。

当時の読者の感想や、新聞・雑誌記事の分析を通して、読者と違う階級・立場の人間をいかに描くかを目的とした『太陽の季節』『美德のよろめき』という小説が、メディアが話題にする際に、読者と同じ立場の人間を描いた物語にすり替えられてしまっていることを指摘した。

『太陽の季節』の場合は、当時の若者世代にあたる読者がブルジョア階級の物語と捉える一方で、大人たちによって当時問題視されていたアプレゲールの問題に回収されてしまい、石原が描こうとしていた「ものの考え方」の問題にまで触れられることはなかった。

また、『美德のよろめき』の場合は当初、優雅さを強調して売り出され、読者もまた節子の贅沢なライフスタイルに憧れを抱きながら作品を読んでいたが、週刊誌において妻の不貞を理由とした離婚が問題となっていく中で、上流階級だからこそ可能な恋愛という解釈からすべての女性の問題へと切り替えられてしまったと考えられる。

## 審査結果の要旨

本研究は、第二次世界大戦後、約十年の間にベストセラーとなり、「〇〇族」という流行語を生み出した4つ小説の考察を通して、戦後日本の精神史を素描し、同時に小説メディアと社会現象や時代精神との関係を考察したものである。本研究が対象とする1947年から1957年の10年間は、GHQによる占領期を経て日本がアメリカ民主主義の影響下に二回目の近代化を遂げ、「もはや戦後ではない」の掛け声のもと高度成長の階につく時期にあたる。具体的には、この10年間に発表された太宰治『斜陽』、源氏鶏太『三等重役』、石原慎太郎『太陽の季節』、三島由紀夫『美德のよろめき』をとり上げ、これらの小説のベストセラー化という社会現象と、それと関係して生じた「斜陽族」「三等重役」「恐妻族」「太陽族」「よろめき族」など、いずれも集団を表す語の流行現象を分析する。

その際、本研究は二つの作業を行っている。一つは、小説がベストセラー化する過程と、小説をもとにした流行語が生み出される過程、およびそれらの背景にある社会状況の詳細な調査である。これは先行研究の批判的検討の上に立ちながら、同時代の新聞、雑誌などを対象として広範に行われている。もう一つは、階級の呼称に関する記述や三人称の語り手の分析など、小説テキストの詳細な分析である。この局面では、一旦ベストセラー化の中で生じた読まれ方から離れ、テキストの構造や細部を詳細に分析することで、各小説が本来もつ意味作用の可能性の全体像を検討している。

本研究は、この二つの作業を関連させることによって、ベストセラー化に伴い小説の読みの可能性のどの部分が注目され、どの部分が読み落とされたのかを明らかにする。その結果、戦後日本の中産階級形成期のベストセラー小説に読者のどのような欲望が反映されていたのか、あるいは読者はベストセラーの消費を通してどのような欲望形成をなしとげようとしたのかという問題に、様々な局面で具体的な解答を与えている。

本研究は、第一部「上流階級への郷愁と「斜陽族」の誕生—太宰治『斜陽』(1947年)—」、第二部「戦後の価値観をどう受け容れるか—源氏鶏太『三等重役』(1952年)」、第三部「階級差をどのように描くか—石原慎太郎『太陽の季節』(1956年)、三島由紀夫『美德のよろめき』(1957年)—」からなる。第一部は、「『斜陽』と上流階級に関する報道との関連性」「階級設定の曖昧さ」「『斜陽』受容における『桜の園』の影響」の三章からなる。第二部は、「『三等重役』のイメージの変遷」「流行語「恐妻」について」「『三等重役』における戦後派重役像」「恐妻と貞操—『三等重役』に描かれた戦後性—」の四章からなる。第三部は「動機なき行為者をいかに描くか—『太陽の季節』論」「上流階級意識のよろめき—『美德のよろめき』論」「『太陽の季節』ブームと「よろめき」ブーム」の三章からなる。本文134頁。400字詰原稿用紙換算、約570枚。

第一部では、流行語「斜陽族」を生み出した太宰治『斜陽』(1947年)ベストセラー化の

実態について考察する。『斜陽』は、現実の戦後日本における華族階級の没落を描いたのではなく、チャーホフ『桜の園』が悲劇的メロドラマとして受容される時代的文脈の中で、現実には先行する形で貴族的なるものの没落を描いていたことを論じる。一章では、1945年から、1951年頃にかけての上流階級に関する報道を詳細に調査し、これまでの通説に反し『斜陽』発表が華族の没落報道が盛んになる現象に先行したことを明らかにする。上流階級問題を皇族の臣籍降下と華族の没落の現象に分けることにより、『斜陽』の周りにあった読書空間の実態を詳細に浮かび上がらせる。

二章では、一章で確かめた階級の問題を踏まえて『斜陽』の階級に関する記述・描写を分析し、主人公一家の階級が、皇族を想定して描かれた可能性が高いことを指摘する。太宰自身の「皇族にほとんど近いくらいの華族」という発言は、『斜陽』構想・執筆時に盛んだったのが皇族臣籍降下報道であったことから考えると、皇族に近いという設定に意味があったこと、また皇族に関する報道と物語内の時間、および登場人物の発言との照応が指摘できることを明らかにする。

三章は、『斜陽』がテキスト前半部だけに注目して没落華族の悲劇として受容される理由を、チャーホフの戯曲『桜の園』との関係から考察する。戦前から戦後にかけてのブームを巻き起こした『桜の園』上演史を同時代の劇評などから詳細に点検し、『斜陽』発表前後において『桜の園』は主人公が新しい人生を歩みだす姿よりも、貴族の没落という悲劇的な面が強調されて受容されていたことを示す。これによって『斜陽』を上流階級の没落を描いた悲劇として受容する背景があったことを示唆する。

第二部では流行語「三等重役」「恐妻（族）」を生み出した源氏鶏太『三等重役』（1952年）を、戦後日本におけるアメリカナイズされた結婚観、夫婦観、家庭観の受容という観点から考察する。一章では、「三等重役」という言葉に焦点を当て、『三等重役』とその原型となった短編「艶福物語」（1951年）を比較する。「三等重役」が戦前派重役の公職追放によるたなぼた式戦後派重役という意味の蔑称から、戦後日本の価値観を体現した肯定的な呼称へと変化したことを分析し、『三等重役』が戦後の価値観を受け入れるための小説として企図されたことを指摘する。

二章では、『三等重役』をきっかけに流行した「恐妻（族）」について調査整理する。この言葉は、『三等重役』を戦後的夫婦観浸透に一役買った小説と考える場合、重要な言葉である。「恐妻」については、『三等重役』連載時期に造られた言葉であるという説と、戦前から存在していたという説が混在する。調査の結果、「恐妻」という言葉は1924年時点で使われていることが確認できたが、『三等重役』がきっかけで流行語化する際には、「愛妻家」と置換可能な、アメリカ的夫婦観の日本的な表現として広く受け入れられたことを指摘する。

三章では、『三等重役』の主人公、戦後派重役桑原社長が戦前派重役と対峙し、立派な社長と評価される一つの理由として、貞操堅固という価値観が利用されていることを考察する。「艶福物語」では、愛妾を囲う行為が重役の甲斐性をあらわすものとみなされるが、『三

等重役』の桑原社長は女性に誘惑されても肉体関係を結ばない貞操堅固なキャラクターとして描かれる。4人の女性とのエピソードを詳細に分析することで、貞操堅固という観念の諸相を細かく分析する。

四章では、桑原社長に与えられた「恐妻家」であるゆえに貞操堅固であるという設定の具体的な分析を通して、『三等重役』が戦後日本におけるアメリカ主導の民主主義教育政策と密接に関係することを考察する。「恐妻家」としての社長像は、日本でも当時多くの人に読まれていたアメリカ漫画『ブロンディ』に描かれた夫婦の姿や、GHQが関与していたといわれる「純潔教育」施策における「純潔」の定義—性的交渉は結婚当事者間におけるもののみを純潔と認める—と重なることを指摘する。

第三部では、流行語「太陽族」を生み出した石原慎太郎『太陽の季節』（1956年）と、「よろめき（族）」を生み出した三島由紀夫『美德のよろめき』（1957年）について考察する。いずれも扇情的な主題がブームの要因とされる二つの小説について、主に三人称の語り手の機能を詳細に分析することを通して、ベストセラー化や映画化を伴うブーム化において小説の記述内容とは関係なくメディア主導の力が大きく働いている実態を分析する。一章では、『太陽の季節』の主人公青年の描かれ方の特徴を、三人称の語り手の分析と処女作「灰色の教室」との比較を通して考察する。『太陽の季節』には、「太陽族」という新語を用いて表現されることとなるような新時代の青年像を、動機なき行為者として描き解説する中産階級知識人としての語り手の存在が特徴的に認められることを指摘する。

二章では、『美德のよろめき』の主人公・節子の描かれ方の特徴を、節子の階級的属性を解説する三人称の語り手の特徴的な階級意識を分析することによって考察する。語り手は中産階級に出自をもつ小説家としての自分には語りえぬものとして、節子の上流階級意識を説明し、その節子の意識に中産階級道徳を相対化する価値を見出している。この特徴からすれば、『美德のよろめき』は、上流階級的価値観から中産階級的価値観に“よろめいた”節子が、ふたたび本来の階級に帰還する物語として読むべきだと指摘する。

三章では、『太陽の季節』『美德のよろめき』が実際の小説テキストの内容とは関係なく、当時の読者の旧華族など上流階級やブルジョワ階層に対する憧れによってベストセラー化し、メディアによる扇情的なキャンペーンによってブーム化した実態を考察する。2小説に関する回想録や当時の新聞・雑誌記事から、同時代の読者の欲望の具体的な形を示し、出版社による作品の新聞広告や特集記事を調査整理することで、出版メディアが階級を意図的に誤読したり性的な主題を強調することでブームを作り出していく実態を明らかにする。

さて評価についてであるが、申請者は太宰治、源氏鶏太、石原慎太郎、三島由紀夫の作品群によく目を通すだけでなく、映画化作品、小説の同時代評や映画評、劇評、さらには各種週刊誌などの雑誌・新聞記事の膨大な文献資料に広く調査の手を伸ばしており、その成果が本研究によくあらわれている。本研究には、論旨の展開からみて整理されていない点や重複する部分が見られたり、分析方法や記述の仕方の点でいくつか小さな問題点も指

摘できるが、全体としては十分研究論文としての水準を満たすものとなっている。以下に3点に分けてその理由を示す。

- ① 十分な先行研究への目配りが見られ、その批判的検討の上に立って慎重な立論がされていること。『斜陽』『美德のよろめき』については、作家論、作品論をはじめあらゆる観点からの多数の先行研究が積み重ねられている。また、『三等重役』『太陽の季節』は、戦後日本の文化史的、精神史的研究、およびベストセラーに関する読者論的研究の対象として近年、文化研究の観点から論じられることが多い。また、流行語についても日本語学、文化史の観点からの仕事がすでに多く蓄積している。申請者はそれらに万遍なく目を通し、論点をよく理解したうえで丁寧な整理をしている。その成果は研究全体にあらわれており、立論を客観的なものになっている。
- ② 多角的な問題意識に基づく広範な文献調査が行われていること。①にのべたような多方面にわたる研究傾向に対応すべく、さまざまな角度からの調査分析がなされている。本研究のほとんどが膨大な文献調査の上に立つと言っていい。ほんの一例をあげると、たとえば第一部一章では『斜陽』連載前に華族没落が広く話題になっていたという通説を検討するために、1945年から1951年にかけての朝日、読売、毎日の3新聞の皇族、華族に関する報道を詳細に調査している。また、第二部一章では「恐妻」という語の戦後におけるコノテーションを確認するために、語史、および流行過程の各種新聞雑誌記事、回想録等の資料を広く押さえている。さらに、第二部四章では、時代に働いていた文化的政治的な力を浮かび上がらせるために、GHQが関与した純潔教育施策関連文章資料を探索調査している。これらの実証的な手続きがこれまで見落とされてきた問題に光を当て、さらに論理的な分析を手堅いものになっている。
- ③ 4つの小説の研究として、また戦後ベストセラーの研究として、さらには戦後の文化研究としてオリジナルな観点を持ち、研究動向に充分資する価値のある研究となっていること。本研究には、広範で膨大な文献調査と、詳細な小説テキスト分析によって新たな観点から研究動向に資する多数の指摘がなされている。文献調査の例としては、『斜陽』ベストセラー化と没落華族報道の関係について、新たな事実と観点を提示していることがあげられる。テキスト分析について言えば、『斜陽』を除いて、ベストセラー小説として処理され小説本文の分析が詳細に行われてこなかった『三等重役』『太陽の季節』『美德のよろめき』の詳細なテキスト分析が、ベストセラー現象の新たな一面に光を当てていることがあげられる。多数の指摘が必ずしも十全に展開できていると言えないことが残念だが、これらの指摘が現在の研究動向に充分意味をもつことは事実である。

すでに述べたが、本研究には申請者の戦後ベストセラー小説に関する深い造詣が示されており、研究論文としての客観性という点からも現在の文学研究や文化研究の水準に達しているというのが、本審査委員会の判断である。そこで、本委員会は博士論文審査の結果

を「合格」とすることに決定した。